

動詞「わづらふ」考

大橋 幸雄
Yukio OHASHI

一

古典語の「わづらふ」は普通次のような意とされている。

A そのことに心がとらわれて思い苦しむ。悩む。心配する。「可尔可久尔 思和豆良比(オモヒワツラヒ) 祢能尾志奈可由(山上憶良)」(万葉五・八九七)

B 難渋する。苦勞する。骨を折る。「こぎのぼるに、かはのみづひて、なやみわづらふ」(土佐―承平五年二月七日)

C 病気になる。病気で苦しむ。後世、「…をわづらう」の形でも用いる。「むかし、をとこ、わづらひて、心地死ぬべくおほえければ」(伊勢物語―一二五)

D (動詞の連用形に付けて用い)その動作・行為がすすらと進ま

ないで苦勞するの意を表す。…しかねる。「中将、言ひわづらひて歸りにければ、いとなさけなくももれて」(源氏―手習)

E *Vazzurai, o, ōta.* (煩ひ、ふ、うた) 病気になる、または、病気にかかっている。

『*Me, I, zzutūnadoou vazzurō.* (眼、または、頭痛などを煩ふ) 眼病や偏頭痛などにかかっている。』また、思う、という意味の動詞やその他の動詞に連接して、苦しみ悩み、当惑している、という意味を示す。例 *Anivazzurō, vomoivazzurō.* (案じ煩ふ、思ひ煩ふ) 『*Xiazzurō.* (為煩ふ) 何をしようかと、どのようにしようかとか迷い、当惑しつつ仕事に手をつけている。(邦訳日葡辞書)

F *Wazurai, -au* フズラン煩 *i.v. To be sick, ill, diseased; to be troubled, perplexed; mewō—, to be diseased in the eyes;*

shokanwo —, to be sick with fever; byōkide —, to be sick; omoi wazurau, to be anxious or troubled. Syn. YAMU. (和英語林集成)

同義語として「やむ」を揚げているところに注目すべきである。

この「わづらふ」という動詞は、もともと精神的に苦しむことを表し、病気で苦しむという意味は中古半ば頃から現れる。

また、「やむ」は、肉体的に苦しむことを表すのがもとの意味といわれ、傷を負う・傷がうずくという意味でも使われる。

現代語としての「わづらう」は、

①精神的に苦しむ。悩む。心配する。

②肉体的に苦しむ。病気をする。病む。

③〈動詞の連用形に付いて〉

ア それをするのが気になって、なかなかできない。

イ なかなかそうならない。ためらう。

の意味で使われる。

「やむ」は、

①病気になる。病気にかかる。

②心を悩ます。

の意味で使われる。

古典語としての精神的・肉体的に苦しむという「わづらふ」・「やむ」の区別は、現代語の「わづらう」にはなく、それでいて「やむ」という言い方も存在するわけである。

平安朝ごろからの辞書(字書)類で「わづらふ」「やむ」を見てみ

ると、次のような具合である。

○類聚名義抄—十二世紀初

痺病 谷正ヤマヒ ヤモヘル
ヤイフル カシク皮命反

際 勅属反又子例反
音勅介反ワツラフ

嬰 カ、ル 禾ツラフ メクルアク
カク ナク マトハル ヤドル

墮 千粉反 オツホロフ
禾ツラフ為敏反 クツカヘス

素 音新 キヌ シタシ カナフモトヨリ
ワツラフ ミサホナリ スナホニキオツ

榮 ノルツカルミタル
サハグ 禾ツラフ

孛 禾ツラフ

靡 密被反
禾ツラフ

累 カ偽反
カラ禾ツラハフシ

○色葉字類抄—治承年間(一一七七〜八二)

息 ヤム 止癢禁罷

煩 ハン ワツラヒ

病 ハイ ヤマヒ
ヤム 皮手反 瘞疾 秦悉反

痾 音阿

○平他字類抄—嘉慶〜康応元年(一一三八七〜九〇)

止 ト ム
シヤム

休 ヤスム
キウ

罷 ヤム

禁 ヤム

畢 ヤム

煩 ハム
ハム

○運歩色葉集—元龜二年(一一五七—)

ワヅラウ
煩
ワツライ

○日葡辞書—慶長八年（一六〇三）

E

節用集

○文明本—文明六年（二四八四）

病^{ヤム} 疾^{ヤム} 已^{ヤム} 止^{ヤム} 休^{ヤム} 救^{ヤム}
終^{ヤム} 息^{ヤム} 歇^{ヤム} 寝^{ヤム} 罷^{ヤム} 輟^{ヤム}

○明応五年本—明応五年（二四九六）

罷^ム 止^同 煩^{ワツラウ} 勞^{ワツラウ}

○饅頭屋本—室町末

止^{ヤム}

ワツラウ
煩

○易林本—文祿四年（一五九七）

止^{ヤム} 罷^同 已^同 休^{ヤスム} 息^同 憩^同 停^{ヤム} 煩^{ワツラウ} 惱^同

○黒本本—十五世紀末

休^{ヤムル} 煩^{ワツラウ} 勞^{ワツラウ}

○蘭例—文化十二年（一八一五）

輟^{ヤム} 止^同 煩^{わづらはし} 勞^{煩累} 心痛^同 病^同 患^同

○和英語林集成—慶応三年（一八六七）

F

以上で注目されることは、

①『類聚名義抄』に「煩」の字の例はなく、「累」が存在していること。また、それ以後の辞書（字書）類には、ほぼ「煩」が存在していること。

「累」の字義には、動詞としてかさなる・かさねる、わずらわす、つなぐ・つながる があり、わづらうはない。

②『蘭例節用集』に「心痛」の註に、「心に」とあること。また、「病」・「患」の註に、「病氣」とあること。

「わづらふ」は、精神的に苦しむことを表し、「やむ」は、肉体的

に苦しむことを表すといわれるのは、ここから由来したのでであろうと思われる。

また、「わづらふ」は、困る、悩む、の意。病気がその原因をなすことが多いから、のちに病気になるのを「わづらふ」というようになった。『時代別国語大辞典』によると、「病気になるの意の例は、上代には見当たらない」とし、

○ にはかにわづらふ人のあるに、験者もとむるに、(枕草子)

この例が最も古いもの一つであろうか。と『枕草子全評釈』(田中重太郎編)では註を施している。

二

さて、この「わづらふ」が、単独用法の他に、複合動詞の下位要素として用いられることがある。たとえば、「見わづらふ」「思ひわづらふ」といったような具合である。ここでは、複合動詞の下位要素となっていて「わづらふ」はすべて、上接動詞に程度が甚だしいという意を内包しているのではないかと考えられる例について視点を置きたい。

〈二一〉くまらずいくつか例をあげてみよう。

- 1 「雨の降りぬべきになん見わづらひ侍(る) (伊勢)
- 2 いらへわづらひて、はてはものもいはねば、(蜻蛉)
- 3 勢多の橋みなくづれて、わたりわづらふ。(更級)

4 七日けふ、かはじりにふねいらちて、こぎのぼるに、かはのみづひて、なやみわづらふ。(土佐)

5 夜ふくるまでつけわづらひてなむやみにし。(枕)

6 極まりなき失礼なれども、立ち帰り取るべきにもあらず、思ひ

わづらはれけるに、(徒)

以上の各例を「…できないで困る、…にくがる、うまく…することができなくて困る」などの意と考えることができる。

〈二二〉そこで、中古の物語を中心に調べた複合動詞の下位要素となっている「わづらふ」の上接語(「—わづらふ」の形であげる)を一覧表にして掲げてみる。

言ひわづらふ	起りわづらふ
思ひわづらふ	思ひわづらふ
おもほしわづらふ	おもりわづらふ
聞きわづらふ	聞こえわづらふ
聞こし召しわづらふ	そぎわづらふ
そ、のかしわづらふ	立ちわづらふ
立てわづらふ	のたまひわづらふ
臥しわづらふ	まじなひわづらふ
見わづらふ	

特に、『源氏物語』では、「思案に困る、思案に余る、思案にくれる」意の用例が多数見受けられる。

7 はた、いと、口惜しかるべければ、如何にせまし」とおほし煩

- ひて、(花宴)
- 8 「いでや」とは、思しわづらひながら、いと、あまりむもれいたきを、(賢木)
- 9 ひめ宮、おほし煩ひて、辨がまゐれるに、の給ふ。(総角)
- 10 この君たちをおきて外には、なずらひなるべき人を、求め出(づ)べき世かはと、おほし煩ふ。(匂宮)
- 11 亡き人の御ために、見苦しかるべきわざを、思しわづらふ。(東屋)
- 12 かの、きこえ給ふも、ことわりなり、又、おほしわづらふも、(蓬生)
- 13 幼き者などもありしに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし(帚木)
- 14 「齋宮の御清まりも、わづらはしくや」など、ひさしう思ひわづらひ給へど、(葵)
- 15 中くなる目をや見む」など、思ひ煩ひにたれど、(玉鬘)
- 16 思ひわづらひて、帰り給ふに、此(の)、せうとの童を、僧都、目とめて、ほめ給ふ。(夢浮橋)
- 17 母君の、とかく思ひわづらふを、聞き入れずして、(明石)
- 18 「かうくのことをなん、思う給へわづらふに。(濤標)
- 19 かたぐ、思ひ給へなん煩ふ」(竹河)
- 20 さらに物の怪の現れ出(で)くるもなきに、おもほし煩ひて、

かゝる隈ぐをも、たづね給ふなりけり。(柏木)

21 いとゞ、つらく心憂き涙のもよほしにおほさる。人々も、きこえ煩ひぬ。(夕霧)

22 苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人々きこえわづらふを、おとゞ、(藤裏葉)

「思ひわづらふ」やその敬語体の「おほしわづらふ」、また、「きこえわづらふ」というスタイルでは、「思案に困る・余る、考えあぐねる」という意味になるのは、当然のように思われる。

「わづらふ」が、もともと精神的に苦しむことを表し、さらに複合動詞の低位要素として用いられている時に、大いに甚だしいという意味を添えていくのではないだろうか。

つまり、「わづらふ」という動詞は、独立動詞としての用法のほか複合動詞の低位要素として用いられると、その上接動詞に対して大いに、たいそう甚だしくの意味を加えることになる。

〔二〕三 ある動作の程度が甚だしいことをあらわす形には、「いと」、「いたく」、「はなはだ」のような副詞を添えることが考えられるが、この複合動詞の低位要素としての「わづらふ」は、どんな場合に用いられたのであろうか。

まず、上接語はすべて動詞であること。また、「わづらふ」がもとも精神的に苦しむという意味に深く関係のある語であることから、その上接語も、「思ふ・聞く」といった心理描写を表す動詞に付きやすかつたのだろう。また、

23 隙もなう、たちわたりたるに、よそほしうひき續きて、立ちわ

づらふ。

(源・葵)

24 「いと、世づかぬ御有様かな」と、見わづらひぬ。

(源・夢浮橋)

などの用例から「立つ・見る」のような上接動詞へとその付く範囲を拡大していったのではないだろうか。

あとがき

この小稿を書くにあたり、関谷浩氏の動詞「ののしる」の考(野州國文學 第十六号)を参考にさせて頂いた。記して感謝申し上げます。

〔注〕この小稿で取り扱った資料は、次の通りである。

- 土佐日記・伊勢物語・かげろふ日記・更級日記・源氏物語・枕草子・徒然草：岩波書店刊「万葉集」本文篇
- 万葉集：岩波書店刊「万葉集」本文篇
- 日葡辞書：岩波書店刊「邦訳日葡辞書」
- 和英語林集成：講談社学術文庫刊「和英語林集成」
- 類従名義抄：風間書房刊「類従名義抄」(観智院本)
- 色葉字類抄：風間書房刊「色葉字類抄研究並びに総合索引」
- 平他字類抄：京大文学部国語学国文学研究室編「平他字類抄」
- 運歩色葉集：京大文学部国語学国文学研究室編「元亀二年本運歩色葉集」節用集
- 文明本：風間書房刊「文明本節用集研究並びに索引」
- 伊京集・饅頭屋本・明心五年本・黒本本・易林本：風間書房刊「古本節用集六種研究並びに総合索引」
- 蘭例：臨川書店刊「蘭例節用集」